

あなたへ

正木武子

兵庫県・四四・主婦

とても寒い日でした。部屋の隅でただ泣いている母を置いて、私はあなたのもとへ走りました。中国自動車道は風花が舞い、行く手の厳しさを暗示しているかのようでした。

多くのしがらみの中、それでもあなたと結婚するには、このような方法しかなかったのです。先に家を出たあなたの愛にこたえるためにも。今思えば、まばゆい程に一途でした。ありのままの私を受けとめてくれる、あなたのまっすぐな想いだけが支えでした。覚えていますか。雪の中の二人だけの結婚式。見知らぬ人達の祝福が嬉しかったね。

そして一八年、今、私達はあなたの実家で両親と子供と家族六人、平穏無事に幸せに暮しています。人生ってほんとうに不思議。自分達にはとうてい及ばない、何か大きな力が働いているのだと思わずにはおられません。ずいぶん回り道をしたけれど、

無駄なこととは何ひとつなかったと言いきれる自分自身が嬉しく思います。

お互いに髪に白いものが混じり、老眼鏡が必要となる歳になって、やっといろんなことがわかったような気がします。辛いのは私達だけではなかったと。そしてその過程があったからこそ、今が、しみじみと幸せに感謝して暮せるのだと。

「若気のいたりだったね」と笑う私に、「そんなことないよ」とさりげなく言ってくれるあなた。結婚生活など、所詮お互い様だと思うけれど、いつも私に花をもたせてくれるあなた。しっかりとここに根づくため、みんなに愛されるよう努力するからね。今まで同様、長い目で見ていて下さいね。まだまだ前途多難だけれど、その時どう頑張れるかが人生なんですね。

私は、あなたがそばにいてくれる限り、大丈夫ですよ。いつまでもあなたの足袋を洗い続けます。

*彼は寺の長男です。若かった頃の思いを風化させたくなくて、思いきって書きました。